

 地域医療の現場から

医療・介護・福祉・行政の
連携の足場となる病院を目指して

国保八代市立病院
院長 森崎哲朗



病院正面

 病院の概要

- 設立年月：昭和30年4月
- 許可病床数：96床（一般病床66床・結核病床30床）
- 入院基本料：15対1
- 職員数：66人
（再掲）医師5人（うち非常勤2人）
看護師38人（うち非常勤15人）
（平成26年4月30日現在）



病院屋上から西方を望む。八代平野を南北に貫くように九州新幹線が走る

環境に恵まれた小規模な病院

当院は八代平野の東の端、九州山脈の西の端に近い妙見町に位置しています。その昔、豊臣秀吉が当地を訪れた際に数日滞在した古麓城跡や九州三大祭りで有名な妙見神社が徒歩5分ほどの所にある、歴史的に由緒ある土地柄です。周辺には樹木が多く、春には桜が病院を取り囲むように咲き誇りすばらしい景観です。八代というと工場の臭いの印象が強いのですが、当院の周囲はこの臭いは全くなく、いつもさわやかな空気に包まれています。緑が多いため、市街地に比べて夏は涼しく、冬は温暖で実に過ごしやすい所です。

当院は市立病院とはいっても規模は小さく、一般病床 66 床、結核病床 30 床でリハビリ施設は無く、現在常勤医師 3 人、非常勤医師 2 人で診療しています。高齢者の寝たきりの患者さんが 8 割を占め、入院期間が長期となっているのが現状です。

八代は人口約 14 万人で市内にはヘリポートを持つ二つの急性期病院があり、市街地に限って言えば医療環境は恵まれた地域です。このような地域で、築 43 年の老朽化した狭い建物とリハビリを持たない当院の役割はかなり限定的なものとなっています。

高齢化社会の中

患者や家族の医療への思いはさまざま

急性期病院で「DNR 方針(蘇生を望まない)」や「BSC の方針(Best Supportive Care、緩和ケア)」の説明を受けて紹介入院となる高齢者の方が増えてきました。急性期病院での説明の多くは適切で当を得たものです。しかし意外なことに、患者さんやご家族は頭では理解されていても、納得まではされていない状況が結構多いのも事実です。

「自然な経過で最期を迎えたい」「苦しまないで過ごしたい」「胃瘻は作りたくない」「どんな形でも生きていてほしい」……。患者さんや家族の思いはさまざまです。急性期病院では高度な医療を駆使して正確な診断が下され、EBM (Evidence - Based Medecine、根拠に基づく医療) に基づいて、予後が判断され、説明が行われます。我々医療人にとっては病气や死は日常的な出来事ですが、多くの患者さんや家族にとっては初めての非日常的な経験です。病气や予後について頭では理解できても「腑に落ちる」までには結構時間が必要な気がします。この時間を確保することは非常に重要と考えています。

在宅医療推進に不可欠な

医療・介護・福祉・行政の連携

急速に進行する高齢化社会では、高齢者の長期入院が増え過ぎると新たな入院治療を要する方々の治療に影響が出てきます。このため一人一人の入院期間はますます短縮されています。特に急性期病院は新たな患者の受け入れのためにもスムーズな退院・転院を進める必要があります。病床数の増加が許されない中でスムーズな退院・転院を進めるために、在宅医療を推進することは避けては通れない道です。しかし、多くの慢性疾患を抱えた高齢者が在宅医療へ移行することは、ところてんを押し出すようなわけにはいかないでしょう。

複数の慢性疾患を抱えた高齢者が、住み慣れた地域で最期まで健やかに暮らすことを目指して、それぞれの地域の実情にあった地域包括医療・ケアの構築が急がれています。この構築に最も必要なものは医療・介護・福祉・行政の顔の見える連携であることは言うまでもありません。八代でも市郡の医師会を中心にして、医療・介護・福祉・行政の連携構築が進行中です。

カンファレンスで患者や家族を支えていく

先に述べたように八代市立病院は小規模の病院であり、充実した急性期病院が二つある八代にあってはその役割は非常に限定的なものです。しかし私たちは一人一人の患者さんやその家族の思い、置かれている社会状況に対し十分に配慮した診療を行いながら「腑に落ちる」時間を確保するよう努めています。そして医師、看護師、患者さんとその家族、ケアマネジャー、訪問看護師、時には行政の福祉関係者を交えたケアカンファレンスを丁寧に行っています。「患者さんやその家族を支える」という共通の目標を持ったカンファレンスは患者さんや家族の不安を和らげると同時に、関わっているいろいろな職種の方々のモチベーションを高める力も併せ持っています。カンファレンスには時間がかかりますが、このような利点があるため私にとっては楽しみの一つです。

小さな連携を積み重ねて 地域包括医療・ケアの一翼を担う病院に

私たちは小さな連携を始めたばかりですが、この小さな連携をたくさん構築していきたいと思っています。多様性のある小さな連携がたくさんできることで、それぞれの患者さんの状況と、暮らす地域の実情に応じた地域包括医療・ケアが実践されると信じています。

老朽化した建物とリハビリを持たない機能的にはまだまだ不十分な病院ですが、医療・介護・福祉・行政と綿密な連携を取りながら、患者さんを中心に多くの職種の方々が集まり、地域包括医療・ケアを実践していく足場となるような病院を目指しています。職員一同「自治体病院としてこの地域のために働く」という自覚を持ち、リハビリ機能を付加した地域包括医療・ケアの一翼を担う新しい病院に生まれ変われるよう日々の運営を行っていきたいと考えています。



夕焼けに染まる八代海